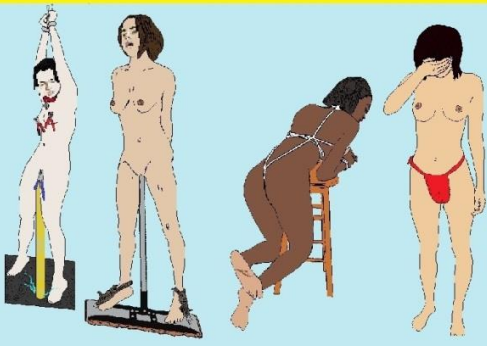
濠門長恭 初期作品集

（ＳＭセレクト 掲載作品）



1:Deep South マゾ紀行
2:ハイテクひとり遊び
3:奴隷留学 *Via Sadism*
4:淫海教育
5:第五列の悲虐

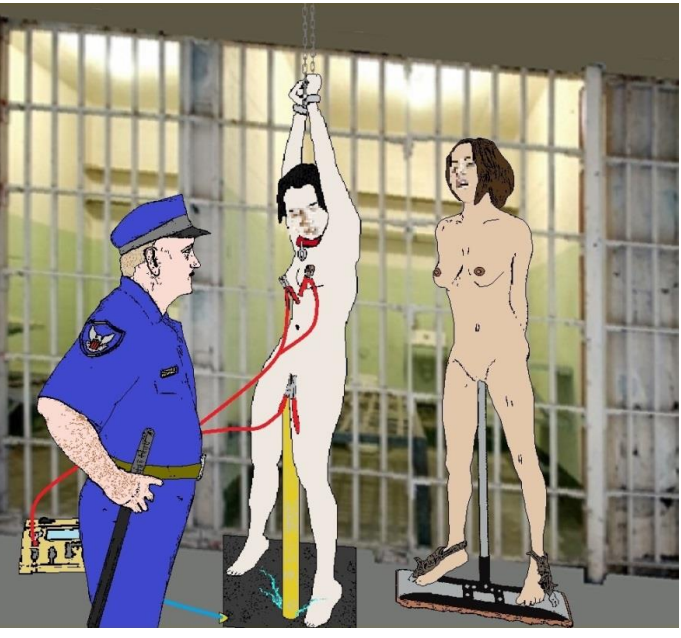
濠門長恭

目次

DEEP SOUTH マゾ紀行 ..... - 4 -
1．不当逮捕 ..... - 5 -
2．全裸尋問 ..... - 14 -
3．串刺し留置 ..... - 36 -
4．覆面裁判 ..... - 41 -
5．死刑執行 ..... - 52 -
6．甘美な悪夢 ..... - 64 -
ハイテク独り遊び
1．ひとり遊び
2．ロボットの誘惑
3．淫らなプログラム
4．可憐な獲物
奴隷留学 Via Slave
1．悪魔の館
2．反逆の罠
3．鞭の刃
4．奴隷修行
5．処女喪失
6．調教レッスン
7．特待生
8．虚しい脱走
9．サディスト達の宴

淫海狂育
１．臨海特別教育
２．矯正指導
３．遠泳訓練
４．反省会の夜
５．二学期
第五列の悲虐
１．身近に潜む陥穽
２．拉致
３．苦悶の訪れ
４．排泄拷問
５．快感拷問
６．連日の虐待
７．裏切り
８．断罪の果てに
後書き

DEEP SOUTH マゾ紀行



１．不当逮捕

　ディーゼルエンジンの重い排気音を残して、グレイハウンド・バスは西へ走り去った。次の便は翌朝だった。少なくとも今日いっぱい、麻原江美は深南部の田舎町に孤立したのだった。

　江美は表通りに面して古びた看板を掲げているホテルに向かって歩きだした。

　やはり、やめておけば良かったかな――江美は、早くも後悔しかけていた。

　アラバマ州Ｊタウン。去年の夏、この地を訪れた日本女性がいた。彼女は悪徳警官に言いがかりをつけられ、三日間留置された。その三日間が通常の取り調べに費やされたのでないことは、いうまでもなかった。

　江美はマゾだった。だが二十二歳の今日まで、いわゆるプレイの経験はなかった。彼女は「ごっこ」に興味はない。彼女が望み、憧れているのは本当に凌辱されることだった。不幸な（？）ことに、これまではまったくそんな体験がなかった。「いじめ」の記事なんか

を読むと羨ましくさえなる。そんな江美が友人からその女性のことを聞かされて、興味を持たないはずがなかった。自分のあさましい願望を気づかれないように注意しながら、江美はその女性が難に遭った土地の名を聞き出したのだった。

年代物のスイング・ドアを押し開けて入ったホテルのフロントには、偏屈そうな老人が座っていた。

『私はこのホテルに宿泊をしたいのです。部屋は空いていますか？』

江美は教科書に忠実な発音と構文で言った。短大を出て二年になるが、商事会社に勤務していると海外からの電話を受けることも多い。江美は英会話に自信を持っていた。

"No.……colored,……yellow……"

老人の発音は訛がひどくて半分も聞き取れなかった。が、その内容は理解できた。有色人種に貸す部屋はない――そう言っているのだった。ディープサウスの人種差別は今も根強いとは聞いていたが、いざ現実にぶつかってみると、どうしようもなく腹が立った。

『けっしてご迷惑はかけません。パスポート

もちゃんと所持しています』

江美は辛抱強く言った。もしかすると身なりのせいかもしれない、とも考えた。Tシャツにジーンズのホットパンツ、荷物は小ぶりのショルダーバッグだけだった。あとの荷物は「アメリカひとり歩きパック」の集合地、ロスのホテルに送ってあった。

老人はパスポートに目もくれようとしなかった。江美が立ち去りそうにないと見ると、手元の電話を取り上げ、ダイアルを回し始めた。警官を呼んでいるのだろう。

江美は踵を返した。こんな小さな町に、大勢の警官がいるはずがない。来るのは例の悪徳警官だ。土壇場になって、江美はおじけづいた。車が通りかかったら乗せてもらって、隣の町へ逃げようと考えた。

しかし。バスの去った方角から猛スピードで近づいてきた自動車は黒と白に塗り分けられていた。

立ち竦む江美の前でポリス・カーは停車した。二人組の制服警官が江美の行く手を塞ぐように立ちはだかった。一人はコーカソイドにしても大柄な方で、江美の目の高さに胸の

バッジがあった。横幅も大きく、肥満気味。剥き出しの上腕に金色の剛毛が密生している。中年だが、三十半ばなのか五十に近いのか江美には見当がつかなかった。もう一人は、江美がハイヒールを履けばちょうど釣り合う程度の身長で、歳も三十にはかなり間があるように見受けられた。

『お前か、トビー爺さんの店でトラブルを起こした他所者は？』

　大男の方が言った。異邦人に分かるようにゆっくり喋っているが、横柄な口の利き方だった。

『私はトラブルを起こしてはいません。宿泊を断られただけです』

　江美はパスポートを提示し、自由なコースで一週間をかけて大陸を横断するツアーに参加している旨を説明した。が、この町でバスを降りた理由を訊ねられると、江美は言葉に詰まった。

『気分が悪くなったので降りました。次のバスで出発するつもりです』

　どぎまぎしながら、あらかじめ考えておいた科白を口にした。

『しかし、今日の便はもうない。どうするのかね？』
『ホテルで宿泊を断られたから、ヒッチハイクで隣町にでも行こうと思っています』
　警官は顔を見合わせてあざ嗤った。
『ハッ、黄色い牝犬（イエロウ・ビッチ）を乗せる物好きがいるもんか』
『それなら、野宿でもします』
　侮辱されて思わず言い返した江美だったが、警官が意地の悪そうな笑みを浮かべるのを見て、失言に気づいた。
『今のを聞いたな、デュース？』
『確かに聞いたとも、ジェフ。この町で野宿すると、この女は言った』
　若い方の警官がゆっくりと答えると、大男の警官は満足そうに頷いた。
『よし。お前を逮捕する。浮浪罪だ』
『待ってください。野宿すると言ったのは、たとえばの話です』
『弁解は裁判のときにしろ。後ろを向いて、両手を車の屋根に置け』
　ジェフは江美の肩を掴んで、有無を言わせずボディチェックを始めた。ぱんぱんぱんと、

脇の下から腰にかけて掌で江美の身体を叩いてゆく。江美は息が詰まりそうになった。
　と。不意に強い力で乳房を掴まれた。
「厭っ！」
　悲鳴をあげて逃れようとする江美。が、ジェフの指は乳房に万力のように喰い込んで離れなかった。
『抵抗すると、罪が重くなるぞ』
　うそぶきながら、片手でジーンズのボタンを外す。そのまま、毛むくじゃらの指が芋虫のように草叢に侵入していく。
『やめてください。こんなボディチェックは違法です』
　江美が半泣きで抗議すると、信じられないことにジェフは手をはなした。だが、ほっとしたのは一瞬にすぎなかった。ジェフは江美を向き直らせると、いきなり手の甲で頬を殴った。
「ひいっ……！」
『覚えとけ。お前は犯罪人で、そのうえ有色人種なんだ。そんな奴には、白人警官のすることに文句をつける権利はない』
　ホテルで宿泊を断られたときとは比べもの

にならない激しい怒りが江美を息詰まらせた。きっと顔を上げて、大男を睨みつける。しかし、それは相手に殴る口実を与えただけだった。二度、三度と江美の頬が鳴った。
『どうだ。まだ分からんのか。分かるまで何度でも教えてやるぞ』
　屈辱の涙を流しながら、江美は"Yes" と答えるしかなかった。
　ジェフは満足そうに頷くと、再びボディチェックを始めた。数人の野次馬が集まってきたのを知ると、得意そうに江美のジーンズを膝下までずり落とした。野次馬達はてんでに口笛を吹いてジェフを煽る。Ｔシャツとブラジャーも剥ぎ取られた。江美はされるがままになっていた。
『よかろう。怪しい物は持っていない』
　わざとらしく言い、手錠を取り出した。江美の両手を後ろに捩じりあげ、半裸のまま手錠を掛けた。だが、この悪徳警官はさらに厳しい拘束を江美に課すつもりらしかった。
『デュース、さっきみたいに抵抗されると危険だな』
　若い方の警官がは、細長いバンドを取り出

した。犬の首輪だった。それを江美の首に巻きつけ、両手を上に引っ張って首輪と手錠を短い鎖で繋いだ。
「ぐふっ……」
　喉を締めつけられて、江美は喘いだ。腕を少しでも持ち上げて首にかかる力を緩めようとしたが、肩が痛くなるだけで効果はなかった。上体をそらすと、僅かに呼吸が楽になった。
『よし、さっさと車に乗れ』
『こんな扱いはひどすぎます。せめて手錠だけにしてください』
　また殴られるかもしれないと怯えながら訴えると、ジェフが嗤った。
『聞いたか、デュース。それに皆も。**手錠**だけにしてくれとさ。このお嬢さんは、どうやら露出狂らしい。それくらいの願いは聞いてやろうぜ』
　ジェフはごつい手でパンティを掴み、一気に引き千切った。抗う暇もなかった。しゃがんで下腹部を衆目から隠そうとしたが、首輪を掴んで立たされた。
『さあ、皆に見てもらって満足したろう。あ

とは署でたっぷり可愛がってやる』

巨漢のジェフと小男のデュースは、江美を後部座席に押し込んだ。

ポリス・カーは野次馬を掻き分けるようにして発進した。

２．全裸尋問

数百メートルも走ると町並みが切れた。ポリス・カーは砂塵を蹴立てて建物の角を曲がり、急停車した。手で身体を支えられない江美は、車が揺れるたびに喉をいっそう締めつけられた。

『降りろ』

首輪に長い鎖が繋がれ、江美は犬のように引き立てられた。

警察署は平屋のコンクリート建築で、入り口のマークがなければ、倉庫とでも見間違えそうだった。入ってすぐのところに申し訳程度の受付デスクがあり、その後ろは留置場になっていた。正面全体が鉄格子になっているので、中の様子は丸見えだった。

鉄格子の奥を見て、江美は息を呑んだ。そこには黒人の少女が入れられていた。しかし、尋常な留置ではなかった。黒人の少女は全裸で壁に吊るされていた。

『どうした。驚いているのか？　お前も今夜はあの黒豚の隣に並ぶんだぞ。よく見て、覚

悟を決めておくんだな』
　鎖を引っ張られて、江美は鉄格子の前に近寄った。黒人の少女は、ただ吊られているのではなかった。両脚の間に、モップが垂直に立っていた。その柄は、少女の股間を深々と貫いているのだった。少女は爪先で立っていた。腕に力を入れて、できる限り鎖にぶら下がろうとしている、
『ああやってなきゃ、柄が壷の奥を突き破っちまうからな』
　歳の若いデュースが、したり顔で言った。モップの柄には血がこびり着いていた。
『キャシイ――この黒豚の名だがな、こいつはヴァージンだったのさ。●五にもなって、珍しいこともあったもんだ』
　少女の足元には汗が滴り落ちて、大きな水溜りを作っている。
『いったい、彼女はどんな罪を犯したのですか？』
　江美は二人の警官を振り返って訊ねた。あまりにもひどい。
『傷害だ。白人の青年を石で殴って頭に傷を負わせた』

『ヘンダーソンがあたいを強姦しようとしたからだよ。正当防衛だよ』
　うなだれていた少女が頭を上げて憤然と叫んだ。
『だけど、あたいは訴えなかったんだ。だから、もう赦してよ。お願いだから』
　後半は泣き声になっていた。
　ジェフが無言で檻を開けた。少女は一瞬訝しそうに巨漢を見詰め、彼の瞳に潜む嗜虐の色に気づいて悲鳴をあげた。
『ごめんなさい。今言ったのは嘘です。二度とヘンダーソンさんを侮辱しません。だから、これ以上は……』
　ジェフは哀願を聞き流して少女の片脚を持ち上げた。一本足では爪先で体重を支えきれず、モップの柄がさらに深く少女を抉る。
『お願い、やめて……』
　ジェフは無表情に、もう一方の脚を蹴飛ばした。
　"Gihhee!"
　少女は絶叫し、そのまま気を失った。
　江美は、へなへなとその場に膝を突いた。違う――そんな思いが頭を掠めた。こんな即

物的で残酷な仕打ちは、彼女の空想していた「凌辱」とはまるで違っていた。
『ようし。キャシーは当分おとなしくしてるだろうぜ。次はお前の取り調べだ』
　鎖を引かれて、江美はよろめきながら立ち上がった。ドアに"Examination Room"と書かれた部屋に連行された。がらんとした部屋の真ん中に置かれた椅子に座らされてから、それが「練習室」ではなくて「取り調べ室」を意味していることを理解した。
　ジェフが机を挟んで正面に座り、デュースは鞭を持って江美の横に立った。学校なんかで使う、先端が丸く膨らんだプラスチック製の鞭だった。
『面倒なことは省こう。名前とか国籍なんかはパスポートの通りだな？』
　いきなり訊ねられて、江美は返事が遅れた。すると、乳房に鞭が叩きつけられた。ぴしりと、乾いた音が響いた。
「痛っ……」
　痛みはそれほどでもなかったが、不意打ちのショックが大きかった。
　再びデュースが鞭を振りかぶった。

『そうです。パスポートの通りです』
　慌てて答えたが、デュースは無情に二撃目をはなった。今度は乳首を真正面から薙払われた。江美は、鋭い痛みに上体を折って耐えた。
『日本の女は行儀がいいと聞いていたが、このお嬢さんは別らしいな。姿勢を崩した罰だ。手錠の鎖を一環分だけ短くしてやれ』
　デュースは素早く上司の命令を実行した。すでに限界近くまで吊り上げられていた腕がさらに引き上げられ、肩の関節がごきりと鳴った。
『さて――お前は、この町で野宿をすると言った。これは認めるな？』
『……認めます』
　答えてから咳込んだ。どんなに上体を反らして顔を上向けていても、呼吸が苦しかった。言い争う気力はなかった。
『よろしい。これで、お前を逮捕した容疑の取り調べは終わった。次は所持品の検査だ。よその州じゃどうか知らんが、ここでは、東部のポルノショップで買った写真とか西海岸の大麻なんかは法に触れるぞ。そういった品

を持っているなら先に申告しろ。少しは罪が軽くなる』
『ありません』
　ほっとしながら、江美は答えた。下着と生理用品くらいしかショルダーバッグには入っていない。どんなにこじつけたところで、法に触れるはずはなかった。
　デュースが部屋から出て、江美の服と荷物を持って戻って来た。机の上にバッグの中身をぶちまける。ジェフは一品ずつを検分していった。買ったばかりの下着を、いちいち袋から取り出しては床に放り投げている。
　と、ジェフの手が止まった。
『これは何だ？』
　ジェフは一本のチューブを江美の鼻先に突きつけた。
『脱毛クリームです』
『聞いたこともないな。塗るだけで髭が剃れるなんて信じられん』
『髭ではありません。女性用です。手や足の無駄な毛を取り除くのに使います』
『本当だな？　麻薬とか媚薬ではないんだな？』

『はい』
　ジェフはにやりと嗤った。
『お前の身体で実験してみよう。使い方を説明しろ』
　江美は厭な予感を覚えた。しかし、拒めばまた鞭で打たれるだけだった。
『毛を取り除く部分に三ミリ――八分の一インチほど塗ります。十分くらい経ってから、一緒に入っているヘラで毛をこすって落とします』
『なんだ、簡単だな。それじゃ、さっそく試してみよう』
　ジェフは立ち上がって江美の前に来た。
『これを塗るんだな？』
　キャップを外して、下腹部にチューブを近づけた。厭な予感は当たっていた。
『やめて。そこはやめてください』
　ジェフは鼻で嗤うだけで取り合わなかった。チューブの口が肌に触れた。思わず江美は腰を引いた。途端に乳房を鞭打たれた。
『おとなしく座っていろ。塗りにくい。もっと脚を開け』
　ジェフはチューブを握り潰すような勢いで

クリームを絞り出し、掌で擦り込んだ。滑り易くなったせいか、わざとなのか、ときおり太い指が花芯に侵入する。
『お願いです。クリームを内側に着けないでください。ネンマク……唇とか性器とかには有害なんです』
　それを聞くと、ジェフはいっそう強く花芯を抉った。
『セックス・オーガンって何だ？　ここのことを言っているのなら、ちゃんとプッシーと言え』
『プッシーにクリームが着くと、そこが腫れたり傷ついたりするんです』
　英語でなら、俗語を口にしても恥ずかしくはなかった。
『まあ、やめておいてやるか。使い物にならなくなったら面白くないからな』
　クリームを擦り込み、さらに分厚く盛り上げて、ジェフは身を起こした。チューブは空になっていた。江美の草叢は雪が積もったように真っ白だった。蛋白質の焼ける臭いが微かに漂い始めた。アンダーヘアが薬品に溶かされているのだった。

ジェフは煙草に火を点け、向かい側の椅子にふんぞり返った。デュースは手持ち無沙汰に、鞭で江美の乳房をなぞり始めた。それがいつ自分の肌に叩きつけられるのかと、江美は鞭のおぞましい感触に神経を集中した。首を仰向けていないと息が詰まるので、鞭の動きを見ることは出来ず、それが、いっそう不安を募らせた。

鎖を緩めてくださいと頼もうかと、幾度か思った。もし罰としてこれ以上締めつけられたら、本当に窒息してしまう。だが、そこまではしないだろう。有色人種を虐待しても、この町では問題にならないらしい。しかし、ちゃんと入国手続きをしている旅行者を殺して行方不明にしたとなると、隠し通すのは困難だ。だからこそ、去年の夏も獲物を帰国の便に間に合うように釈放したのだと、江美は推測していた。

『よし、十分経ったぞ』

ジェフが立ち上がった。手には、脱毛クリームとセットになったヘラを握っている。それを乱暴な手つきで江美の下腹部に当てがった。

『これでこするんだったな』
　皮膚を抉るように、力まかせにヘラを動かした。黒い筋を埋め込んだままクリームが掻き落とされていく。
『面白いように取れるな。だが、刈り残した芝生みたいに短い毛が残ってるぞ』
　ジェフはさらに力を入れて江美の肌を抉った。同じところを数度往復すると、白い肌がすっかり剥き出しになった。
　ヘラは草叢の周辺から中心に向かってじわじわと責めてきた。下腹部の飾りがほとんどなくなると、ジェフは江美に両脚を机の上に乗せるように命令した。江美は言われるままに恥ずかしい姿勢をとった。
「んんっ……」
　花びらをヘラでこすり上げられ、江美は苦痛に呻いた。それを聴くと、ジェフはいっそう執拗に花びらを責め立てる。
『へっ、この牝犬（ビッチ）、よがってるぜ』
　花びらの合わせ目から顔を覗かせた蕾をめざとく見つけて、デュースが囃し立てた。江美にとってはただ苦痛でしかないが、局部への刺激は、彼女の意思とは無関係に反応を呼

び起こしていた。
『警官が職務に励んでいるってのに、ひとりで気分を出しやがって――』
　デュースが鞭を振り上げた。
『やめてください。ぶたないで……』
　鞭は空気を切り裂いて、乳房の上に炸裂した。これまでにない、強い打擲だった。
「ぎゃあっ！」
　江美は全身をのけぞらせて跳ね上がり、反動で床に転げ落ちた。
『立て。さっさと元の姿勢をとれ。もう一発喰らいたいのか』
『もういいさ、デュース。芝刈りは終わりだ。留置場にぶち込んどけ』
　一瞬、苛酷な取り調べは終わったと思って、江美はほっとした。しかし。これから加えられる責めに思い至ったとき、安堵は恐怖に変わった。
『お願いです。あれは厭です！』
『あれって、何のことだ？』
　ジェフがとぼける。江美は羞恥も忘れて即物的な表現を口にした。
『プッシーにモップの柄を入れて吊るすのは

――あれはやめてください』
『やめてほしいのか？』
　ジェフが意地の悪そうな口調で言った。何か企んでいることは確実だった。しかし江美は、はいと答えるしかなかった。
『日本じゃ、寝転がったままで人にものを頼むのか？』
　江美は慌てて起き上がり、床の上に正座した。
『キャシーがされているような留置は赦してください』
　上体を折り、首輪の拘束にさからって深々と頭を垂れた。
『願いを聞いてやってもいいが、それはお前のこれからの態度にもよるな』
『どうしろと言うのですか？』
『自分で考えろ。ヒントだけは教えてやる。ものを頼むときには、ただ口で言うだけでは、たいして効果がない。だが、今のお前は、所持品をすべて没収されている』
　ヒントが聞いて呆れる。
『抱かせろというのですね？』
『いいや』

　ジェフは机の向こう側でふんぞり返って、二本目の煙草に火を点けた。
『勘違いするな。誰が黄色い牝犬なんぞを抱きたがるものか。楽な拘束で留置してもらうお礼にどうしても抱いてくださいと、お前から望むのなら願いを聞いてやらんでもないと言ってるのだ』
　この男は意外にナイーヴなのかもしれないと、江美は思った。恥ずかしい言葉を女性に言わせて楽しむなんて、ごつい身体に似合わない。だが、それを口にするのが屈辱的であることに変わりはなかった。
『どうした？　いつまでも黙っていては分からんぞ。それとも、そうやって時間を稼いでいるのか？　あの黒豚より厳しい方法で留置してやってもいいんだぞ』
『……どうぞ、私を抱いてください』
　やっとの思いで江美は呟いた。
『よく聞こえんぞ。もっと大きな声で、なぜ抱いてほしいのか、はっきり言え』
　デュースが、また鞭で乳房を突っつきながら促した。
『プッシーにモップの柄を突っ込んで吊るす

のをやめてください。そのお礼に、私を抱いてください』
『よかろう。願いを叶えてやる。デュース、鎖を少し緩めてやれ』
　手首が肩胛骨よりも下がるくらいまで鎖が緩められた。江美は取り調べ室の正面にあるオフィスへ連れて行かれた。
『抱いてほしいと言ったのはお前だ。自分で全部するんだな』
　ジェフはズボンを脱いでソファに寝た。両手を頭の後ろで組み、江美を見上げてニヤニヤしている。江美がきょとんとしていると、デュースの鞭が尻を襲った。それほど力は入っていなかったが、たて続けに打たれた。
『やり方が分からんのか？　さっさと始めないと尻の皮が剥けちまうぞ』
『手錠を外してください』
『口を使え』
　江美を見上げて、ジェフがうっそりと言った。その間も、デュースは江美の肩を押さえつけて鞭を浴びせ続ける。
　江美はジェフの前に跪いた。ようやく、鞭がやんだ。ジェフのパンツに顔を近づけ、縁

の部分を舌で掬い取り、口にくわえてパンツをずり下げた。むっと饐えた臭いが鼻をつく。彼の分身はサラミソーセージといい勝負になるくらいの太さがあったが、それでもまだ萎えたままなのだった。上目遣いに様子を窺うと、ジェフの視線が正面から江美を見据えていた。

『どうした？　これを使えるようにするのもお前の仕事だぞ』

　きっと、わざと気を散らしているんだ――そう思うと悔しかった。たいしてためらうことなく江美は、その柔らかな肉棒を口に含んだ。先端部から裏側へと舌を這わせると、さすがにジェフもこらえきれず、それは急激に膨張した。まだ幾分柔らかさを残していたが、それでも、これまでに経験したことのない太さと長さだった。くびれた部分をなぞるうちに、さらに硬さを増した。江美は顔を上げた。

『ずっと手を使わせてもらえないのですか？』

　当然だ、というようにジェフが頷いた。

　江美は立ち上がり、ジェフの腰を跨いだ。聳え立った怒張を狙って腰を沈める。なぜか、恥ずかしいという気持はなかった。恐怖も今

は薄らいでいた。屈辱はそのままだったが、それはむしろ江美を興奮させていた。抱いてくださいと言わせることにこだわったジェフの態度や、鞭打つデュースの手加減が、江美に幾らかの安心感を与えていた

江美は脚を思い切り広げ、花びらでジェフの分身を包むようにした。が、そこからさらに腰を沈めると、するりと逃げられてしまう。失敗を繰り返すうちにジェフのものが萎え始めた。江美はソファから下り、再びそれを口に含む。クーラーの効いた部屋の中で、いつか江美は全身を汗に濡らしていた。

ぐん、と突き上げられるような手応えを下半身に感じたのは、十分以上も悪戦苦闘を続けた後だった。

『ヒューッ、命中！』

ジェフが口笛を吹いて囃し立てた。が、すぐに厳しい声でつけ加えた。

『こら。もっと尻を振れ』

それに応えて、デュースが鞭を乳房に走らせる。

上体で危なっかしくバランスを取りながら、江美は上下運動を始めた。ごく上品に表現す

るなら――口一杯に頬ばったものが、口の中で滅茶苦茶に暴れ回っているような感触だった。江美は一気に急坂を駆け登っていった。
　しかし、ジェフの達する方が早かった。ぐにゃり、と巨体が弛緩する。
『いつまで尻を振っている。重くてかなわん』
　欲望を放出した男は冷淡だった。
『次は俺の番だ』
　デュースが江美の肩を掴んだ。
『いくらジェフの部下だといっても、こればっかりは二番手はご免だ。俺は別のところで楽しませてもらうぜ』
　恐怖が江美の頭を掠めた。そこはまだ処女だった。だが、恐怖のなかに甘美な疼きがなかったといえば嘘になる。
『来な』
　デュースは再び長い鎖を首輪に繋いで江美を引き立てた。彼の意図が分からず、江美は不安になった。江美は建物の裏手に連れ出された。そこは洗車場らしく、打ち放しのコンクリート床になっていた。ぽつんと立った柱から水道の蛇口が突き出ていた。デュースは江美をその柱に繋いだ。鎖に引っ張られて、

江美は床に膝を突いた。すぐ目の前に、ホースが蛇のようにとぐろを巻いていた。
『牝犬らしく床に這え。這って、こちらに尻を突き出せ』
　江美は、これから加えられる責めを悟って悲鳴をあげた。
『厭です。そんな……水をあたしのお腹に入れるのでしょう？　そんなひどいことは赦してください』
『ほう、そうすると、なにか――糞のついた薄汚いアヌスに俺様の神聖なるコックを突っ込めと言うのか？』
『汚いと思うのなら、普通の――普通のところを使ってください』
　デュースは無言で、いきなり江美の脇腹を蹴りつけた。
「ぎゃん！」
　江美は吹っ飛び、がくんと鎖に首を引き戻される。うずくまって痛みに耐える江美。
『そのまま尻を突き出せ』
　非情な声が頭上で響いた。江美は涙を滲ませながら、のろのろと命令に従った。ほんの束の間でも、こんなサディスト達に気を許し

ていた自分がひどく腹立たしかった。
　尻たぶを左右に割り開いてアヌスに硬い感触が押しつけられる。ホース先端の金属製のノズルが、ぐりぐりと捩じ込まれる。次の瞬間、水が凄まじい勢いで腸の中に注ぎ込まれた。
「んぐぐ……」
　見る見るうちに腹が膨らんでゆく。今にも腹が破裂しそうな圧迫感が江美を襲った。
『お願いです。もう、やめて下さい』
『まだだ。まだ、二ガロンがいいとこだ。あのキャシーでも三ガロンは入ったぜ。東洋人は腸が長いっていうから、五ガロンは呑み込むんじゃねえか？』
　五ガロンといえば、二十リットルに近い。とても無理な数字だ。ただの脅しだろうけれど……限界ちかくまで注入されるのは間違いないと、江美は震えあがった。
　水流が止まったとき、江美は半ば気を失いかけていた。柱に繋がれた鎖を外された。鎖は花芯を割って後ろへ回され、ノズルを固縛してから再び首輪に結ばれた。
『立ってみろ』

江美は命令に従おうとしたが、膝を突いたまま上体を起こすのがやっとだった。
『ほほう。これはまるで蛙だな』
いつの間にかジェフが横に立っていた。靴先で膨らみきった腹を軽く蹴る。ぶよんぶよんと腹がゆれる。その度に、江美は刺し込まれるような激痛に襲われて呻いた。
『ホ、ホースを抜いてください。もう我慢できません』
『我慢することはない』
デュースが残忍な口調で応えた。
『好きなだけ悶えていいぞ』
「ひいっ……」
『ところで――俺は、立てと言わなかったか？』
『言いました。でも、身体が重くて、とても無理です。赦してください』
『立て、と言ったんだ』
デュースは蛇口を捻った。今度は少しずつだったが、再び圧迫が強まり始めた。
絶望に襲われながら、江美は必死に両足を踏ん張った。全身から噴き出した脂汗が、夕陽を照り返して凄惨に光る。よろめきながら、

江美は辛うじて立ち上がった。
『立ちました……水を止めてください』
　デュースは水道を止めて、洗車場の奥からバケツを持って来た。
『この上にしゃがめ』
　江美はほっとした思いで命令に従った。鎖が緩められると、腹腔内の圧力はノズルを押し戻した。激しい水流の音がバケツの底を叩く。羞恥の感情はとっくに消し飛んでいた。排泄の快感だけが江美を支配していた。
　水流がやむまでには数分がかかった。バケツを跨いだ姿勢のままぐったりしている江美に、デュースは再び残酷な命令を下した。
『もう一度洗ってやる。床に這って尻を突き出せ』
『赦してください。きれいになったはずです』
『そうか？　もし俺様のコックに糞がひとかけらでも着いたら、キャシーと同じようにして、ついでにバックの方は十ガロンの水を入れっぱなしにしてやるぜ』
　打ちひしがれた思いで、江美は浣腸を受ける姿勢を取った。
『……もう一度してください』

デュースは、さっきよりもいっそう乱暴な手つきでノズルをアヌスに突っ込んだ。再び腹が妊婦みたいに膨れ上がると、今度はすぐに排泄を許した。だが、その水が微かに色づいているのを見て取ると、三度目の水浣腸を宣告したのだった。

デュースの怒張が江美の後ろを貫いたとき、ほとんど痛みは感じなかった。冷えきったアヌスに、肉棒の温もりが心地良かったほどだった。

３．串刺し留置

『そろそろ勤務時間が終わるな』
　コンクリートの床に突っ伏した江美の頭上でジェフがのんびりと言っていた。
『このお嬢さんを檻にぶち込んで、今日は終わりにしよう』
　首輪を引かれて、江美は立ち上がった。身体は鉛のように重たかった。
『さて――どんなポーズをつけてやればいいかな、ジェフ？』
『決まってるさ。このスベタは色仕掛で俺達に手心を加えさせようとした。年下のキャシーがひどい目に遭っているというのに、彼女への慈悲は乞いもせずに、だ。こいつはどうあっても、キャシーより楽をさせる訳にはいかんな』
　引きずられて歩いていた江美は、それを聞いて、慌てて抗議した。
『約束が違います！　それに……色仕掛だなんて……あなた達があたしの身体を要求したのではないですか』

『いいや』
　ジェフが意地悪く跳ねつけた。
『お前から抱いてくれと言ったんだ。なんなら、証拠のテープを聴いてみるか？』
『……』
　江美はジェフの陰険な企らみを思い知らされて、うなだれるしかなかった。
『心配するな。色仕掛は重い罪だが、明日の裁判まで不問にしておいてやる。それから、プッシーにモップの柄を突っ込んで吊るさないという約束は守ってやる』
　江美は留置場の前に引き立てられた。黒人少女のキャシーが、息も絶えだえといった風情で三人の様子を見守っていた。彼女は、もう哀願すらしようとはしなかった。
　檻に入れられた江美は、手錠と首輪を外された。身体の前であらためて手錠を掛けられ、それに鎖を通して爪先が床から離れるまで吊り上げられた。手首に手錠の縁が喰い込んで、鋭い痛みを江美に与えた。
『脚を開け。こいつはモップの柄じゃないからな』
　ジェフが手にしているのは、直径がモップ

の柄の倍はありそうな金属のパイプだった。
諦めきって、江美は両足を左右に広げた。冷たい異物が、花芯の中央を貫いた。ジェフの肉棒より、充満感はずっときつかった。それが、膣壁を突き破りそうになるところまで押し込まれた。爪先が床に触れる寸前まで下ろされてから、パイプを支えている手が外された。途端に、するりとパイプが滑り出て床に当たった。
『お前がプッシーで締めつけていないと、こうなる訳だ』
　ジェフが、意味ありげに言った。
『パイプの下に金属の板を敷いて――板には電線が取り付けてある。そして、このクリップを……』
　言いながら、ジェフは小さなクリップを取り出した。それで江美の乳首を挟む。
「んんっ……」
　鋭い痛みだったが、耐えられないほどではなかった。が、三つ目のクリップがずっと下に向けられるのを見て、江美は目を固く閉じた。果たして、クリップは木の芽を咬んだのだった。

「ぎゃーっ！」
『ん？　どうした。これからが、肝心なところだぞ。このクリップにも電線が付いてるな。この電線と――金属板からの電線を、この箱に繋いでスイッチを入れる』
「ぎゃああっ……！」
　江美は苦悶にのたうちまわった。全身を痙攣させ、口の端に泡を吹いた。
『と、電気が流れる仕組になっておる』
　スイッチが切られると、江美はがくりと首を垂れた。びんたを喰って、江美は薄目を開けた。
『腰を落として、パイプをしっかり咥え込め』
　鎖が緩められると、江美は言われた通りにした。腹の奥を突き破られるような痛みに耐えて、膣を思い切り締めて膝を伸ばす。パイプは金属板から離れて宙に浮いた。
『その調子だ。そうやって一晩を過ごすんだな』
　電撃装置のスイッチを入れ直し、二人のサディスト達は檻を閉めた。
『待ってください！　お願いです、こんなひどい事は赦してください。せめて、せめて電

気ショックだけは赦してください！』
"
『グンナイ、イエロウ・ビッチ』
　ジェフは玄関から出て行き、デュースは江美に背を向けて受付デスクにふんぞり返った。さらに叫ぼうとしたとき、力が緩んでパイプが滑った。
「ぎいいっ……！」
　今度はスイッチを切ってくれる者はいなかった。電撃に耐えながらパイプを咥え直すしか、この拷問を逃れる道はなかった。
『あとくされのない他所もんだからって、ずいぶんひどい目に遭わされてるね。あんた、いったい何で捕まったの？』
　さすがに見兼ねてキャシーが囁きかけたが、江美には、それに答える気力など残っていなかった。
　これから少なくとも十二時間は、この責め苦が続くのだ。江美は、静かに啜り泣き始めた。あらん限りの力をこめて膣を締めながら、啜り泣きはいつまでもやまなかった。それを中断するのは、彼女自身の悲鳴だけだった。

４．覆面裁判

あらたな電撃に襲われて、江美は意識を回復した。ジェフとデュースが、制服をきちんと着けて目の前に立っていた。

『いつまで寝ているつもりだ』

再び電撃。江美は悲鳴をあげ、慌てて下腹に力を入れて膝を伸ばした。

電撃装置の電源は乾電池だった。電撃は最初の十数回以後は次第に弱まり、夜半にはピリピリ感じる程度にまで落ちていた。その後は、手首に喰い込む手錠の痛さよりも睡魔の方が強かった。今、乾電池を交換された装置は最初の威力を取り戻していた。

『お前達を裁判に連れて行く』

両の乳首とクリトリスを挟んでいたクリップがはずされた。江美は吊り上げられ、忌まわしいパイプが股間から抜き取られる。

江美とキャシーは拘束から開放され、裏庭に引き出された。早い夏の朝は、もうすっかり明けていた。昨日の昼から何も口にしていない江美は、猛烈な喉の乾きを覚えた。

『手を後ろに組んで、じっとしていろ。姿勢を崩した奴は、次の週末まで裁判を延期してやる』

二人の生贄はジェフの宣告の意味を悟った。裁判が一週間延期されれば、その間彼等に嬲られることになる。

ジェフが合図すると、デュースがノズルを二人に向けて水道の蛇口を捻った。細く絞った水流が二人に叩きつけられた。棒で激しく突かれるほどの衝撃だった。水流が乳房に向けられると、クリップに傷つけられた乳首が鋭い痛みを発した。顔面に浴びせられると、まったく息が出来なかった。水は鼻から容赦なく侵入したが、江美は後ろに組んだ手を握り締めて苦痛に耐えた。

水が止まった。厭というほど水を呑みこんだ江美は、咳込みながら恐るおそる目を開けた。黒い紐を持ってジェフが近づいて来る。今度はあれで縛られる――手錠と首輪よりは楽かもしれないと思った江美だったが、隣に立っているキャシーの表情に気づいて不安になった。彼女は両目を一杯に見開いて、その紐を見詰めていた。チョコレート色の裸身が

微かに震えている。
『お願い、マスター。普通のロープにしてください』
　ごく自然にマスターと言う――それは、彼女達黒人が普段から虐げられていることの証でもあった。しかし。黒い紐の正体に気づいた江美は、それどころではなかった。
『こいつが乾ききる前に裁判が終わることを祈るんだな』
　ジェフが黒人少女を後ろ手に縛りあげていった。水を吸った皮紐が、少女の柔肌にぎりぎりと喰い込む。乾くにつれて、それはさらに厳しく全身を締めつけていくだろう。
　キャシーが終わると、江美の番だった。肩まで捩じあげられた手首を縛った皮紐は、そのまま二の腕に回され、あっという間に高手小手に縛られてしまった。
『どうだ。ちょっとしたテクニックだろ？この縛り方はな、日本の旅行者から没収したポルノ雑誌で覚えたんだ。自分の国の方法で縛られた感想を言ってみろ』
「……」
　その旅行者は、去年の女性ではないだろう

か。だとすると、彼女は何を考えてそんな雑誌を持っていたのだろうか。
『感想を言え』
　胸に掛けられた皮紐が引き絞られた。上下から圧迫されて、乳房が鞠のようにくびれた。そのせいなのか、乳首がぷくりと顔を覗かせるのが感じ取れた。
『感想は……分かりません』
　息を吐き出したまま縛られるのを避けようとして、江美は小さな声で答えた。ジェフは、さらに江美を言葉で嬲ろうと口を開きかけたが、腕時計を見て思い直したようだった。キャシーと江美のウエストに別のロープを巻きつけ、それぞれの両端を左手で握った。
『よし、お化粧は終わりだ。デュースの後ろに着いて行け』
　濡れ鼠のまま、二人は引き立てられた。ポリス・カーには乗せられず、町から遠ざかる方角に歩かされた。埃っぽい砂利道の上に、二筋の滴が点々と足跡を刻んで行った。

　まだ朝とはいえ、南部の日差しはきつかった。十分も歩くと身体は乾き、少しずつ皮紐

も縮み始めた。一刻も早く目的地に着くことだけを願い、デュースの後ろ姿を追って歩く江美は、いつか自分達が柵に囲われた私有地に足を踏み入れたことにも気づかなかった。

二人が連行されたのは、農場の大きな納屋だった。その前に立ち竦んだ江美に、キャシーが囁いた。

『あんた、まっとうな裁判を受けさせてもらえると思ってたの？』

『でも、これは……？』

納屋の扉が開き、二人は突き飛ばされるようにして中へ入った。そこで、江美は再び立ち竦んだ。納屋の中には十数人の人間が待ち受けていた。全員が白い頭の尖った覆面を被り、白いローブのようなゆったりとした衣服に身を包んでいた。

クー・クラックス・クラン（ＫＫＫ）――江美は、これまでにない恐怖を覚えた。白人至上主義者。数多くの黒人をリンチで殺戮してきた狂人の集団。

覆面の男達――男ばかりだと、江美は直感した――は、金糸で袖に縫い取りを施した一人の男を中心に、壁に沿って左右に居流れて

いた。その首領らしい男の前に、江美とキャシーは立たされた。
『これより、二匹の穢らわしい牝豚の裁判を始める』
　首領がゆっくりと宣言した。それに応えて全員が『オーッ』と和した。首領は二人の警官に江美を預けて後ろに下がらせた。ざわめきは急速に引いてゆき、納屋の中は異様な静けさに包まれた。
『まず、キャスリーン・レイトン・グレイ。お前は、白人であるトビイ・ヘンダーソンが慈悲深くもお前を抱いてやろうとしたのを拒み、石で彼の頭を殴りつけて重症を負わせた。有罪と認めるか？』
　キャシーは、きっと頭を上げてその首領を睨んだが、やがて力なくうなだれた。一切の抗弁は無駄なのであった。
『……認めます』
『被告は有罪を認めた。本来ならば被告の罪は死刑に値するが、素直に罪を認めた点、並びに被告の年齢を考慮し、被告を鞭打ち百回の刑に処す。異議のある者は申し出よ』
　首領の判決に異を唱える者はいなかった。

キャシーは不貞腐れた表情で俯いていた。
『異議はないものと認める。それでは、これより直ちに刑の執行を行う』
白衣の男達が、ざわざわと動き始めた。納屋の扉が開けられ、キャシーは男達に引き立てられた。江美の横を通るとき、
『へん、鞭打ちは最初から分かりきってたわよ。こいつ等に、昔みたいなハンギング（縛り首）をやる度胸なんかあるもんか』
早口で囁くように言った。そうだったのかと、江美は幾分安心した。
江美は二人の警官に挟まれて、一番後から外に出た。
キャシーは納屋の裏へ連れて行かれた。皮紐を解かれ、大きな木の枝に両手を高々と吊るされた。多分、かつてはこれが「奇妙な果実（黒人の死体）の成る木」だったのだろうと想像して、江美は胸の奥に冷たい物がこみ上げるのを感じた。
そんな江美の感慨には関係なく、刑の執行が始まっていた。
革製の太く長い鞭が空気を切り裂いて飛び、少女の背後を襲った。バシッと、重い音が江

美の耳を打った。が、少女の悲鳴は聞かれなかった。
『ひと一つ』
　間延びした声が回数を数える。二度三度と、鞭は少女の臀部に炸裂した。褐色の肌にもそれと分かる、紅い条痕が刻まれる。五度目には、鮮血が飛び散った。それでも、キャシーは僅かに呻き声を漏らしただけだった。泣き叫んでも、それは男達を喜ばせるだけでしかない。苦痛に耐えることで、彼女は白人に果敢ない、しかし精一杯の抵抗を示しているのかもしれなかった。
『こっちを向かせろ！』
　じれた声が飛ぶ。ひとりの男が歩み出て、キャシーの腰を掴んで乱暴に向きを変えさせた。処刑者は鞭を大きく横に振りかぶり、力まかせに少女の胸乳を薙払った。手荒い愛撫を受けたように乳房が歪み、跳ね踊る。歯を喰い縛って耐えるキャシーの表情を、江美は惚けたように見詰めていた。江美は、この少女に尊敬の念さえ抱きかけていた。
　十回で、処刑者が交代した。
『俺様のは、ちょいと厳しいぜ』

言うなり、その男は手首のスナップを効かせて、鞭を突き出した。鞭の先端は一直線に伸び、少女の股間を抉った。

"Guihyaaaa……!!"

キャシーは絶叫した。がくりと、糸の切れたように首を垂れた。しかし、生贄に休息は許されなかった。別の男が、アンモニアの入った小壜をキャシーの鼻にあてがう。赤ん坊がむずかるような声をあげながら、少女は意識を取り戻した。処刑が再開される。

男は再び股間を狙って鞭を放ち、キャシーに悲鳴をあげさせた。

三度目の失神から醒めたとき、ついにキャシーは屈服した。

『お願いです、マスター。もう……プッシーは厭。どうぞ、他のところを打ってください』

キャシーの頬を涙が伝い落ちた。無論、その哀願は観客達の嗜虐心を煽るだけでしかなかった。

『構うこたねえ。もう二、三発喰らわせてやれ』

『それじゃ手緩い。プリックを摘み取って、不感症にしちまえ』

口々に汚い言葉で野次る。
江美は目を伏せた。ひどく息が苦しかった。十回の受け持ちが終わって、処刑者が交代した。三人目の男は、前の二人ほど残酷ではなかった。もちろん手加減などしなかったが、故意に急所を狙い打つような真似はしなかった。ショウの幕間と割り切っているのか、観客からも不平は出ない。
江美はほっとした思いだった。だが、息苦しさは変わらなかった。否、かえって強まったようでもあった。皮紐が縮んでいる――江美は、自分が本当に呼吸を妨げられているのだと気づいた。手首も締めつけられて、とっくに感覚が失せていた。
『ジェフ……いえ、マスター』
江美はキャシーに倣って、屈辱的な呼び掛けで警官の注意をひいた。
『紐を緩めてください。今にも息が詰まりそうです』
『昨日の経験で少しは賢くなったと思ったがな』
というのが、ジェフの返事だった。
『お前等は白人にものを頼む資格なんかない。

今度だけは聞かなかったことにしてやる。だが……』
　キャシーの悲痛な絶叫がジェフの言葉を中断させた。処刑者は早くも四人目に変わっていた。その男の鮮やかな鞭さばきを見ながら、ジェフは科白を言い足した。
『だが、もう一度、紐を緩めろなどと言ってみろ。お前を地面に縛りつけて、裁判は午後まで延期してやる』
　もちろん、そんな目に遭わされれば、真夏の陽光は皮紐を極限まで縮ませて、正午になるずっと前に江美の呼吸を止めてしまうだろう。
『済みませんでした。もう言いません』
　江美は呟き、うなだれたまま立ち尽くすのだった。

５．死刑執行

キャシーの処刑は一時間半に及んだ。十人目の処刑者が十発目を打ち終えると同時に、キャシーはがくりと全身を弛緩させて、吊るされた両腕に体重を預けた。

身体中から血を滴らせ、意識を失って木の枝にぶら下がる黒人少女に関心を持つ者は、もはや一人もいなかった。白覆面の奥から覗く十数対の目は、一様にあらたな犠牲者に注がれていた。

江美は納屋へ連れ戻され、裁判が再開された。

『エミイ・アサハラ。お前はこのＪタウンに宿のあてもなく立ち寄って野宿を図り、かつ、大胆不敵にも警官を色仕掛で買収しようとした。罪を認めるか？』

金色の刺繍を施した白衣で全身を隠した首領が、厳かな調子で言った。

『認めます』

答える江美の声は掠れていた。首輪で喉を締められていたときは、呼吸が苦しいとはい

っても、無理をすれば息を吸い込むことも出来た。だが、胸を圧迫されていては、どんなに努力しても僅かな空気しか肺に入らないのだった。全身を鞭で切り刻まれる恐怖よりも、この緩慢な窒息から抜け出る欲求の方が強かった。だいいち――裁判とは名ばかりの茶番劇で何を抗弁しようとも、刑は最初から決められているのだ。

首領は満足そうに頷いた。

『被告は有罪を認めた。しかし、そのことによって、いささかも罪が軽くなるものではない。有色人種の浮浪罪は厳罰に値する。加えて、身の程知らずにも警官に贈賄を図った。被告の罪は極めて重大であり、本法廷は死刑を宣告するものである』

首領の宣告を聞いて、一同が歓声をあげた。そんな馬鹿な――江美はうろたえて周囲を見回し、それから、首領がまだ何か言い足すのではないかと、もう一度正面に向き直った。しかし、すでに男達は壁から離れ、江美を取り巻き始めていた。

『待ってください！　死刑だなんて、そんな……嘘でしょ。あなた達、有色人種の女性を

辱めて楽しんでいるだけの……』
　頬を殴られて、江美は言葉を途切らせた。大勢の男達にこずかれながら、江美は再び納屋の外へ引き出された。
『厭よ！　人殺し！　私は何も悪いことをしていないわ。助けて、誰か……！！』
　皮紐に胸を締めつけられながら、江美は出せる限りの大声で必死に訴えた。だが、男達はまったく耳を貸さずに、無言で江美を処刑場へ追い立てた。
　空き地に太い杭が打たれ、そこに江美は縛りつけられた。その周りに干草の束が積まれていく。火刑――生きながら焼かれる恐怖が江美を打ちのめした。泣き、叫び、哀願を繰り返しても、誰ひとり応ずる者はなかった。その沈黙が江美の気力を挫いた。いつか江美は言葉を失い、低くしゃくりあげ涙をぼろぼろこぼしながら、自分の周りに積み上げられてゆく干草をぼんやりと見詰めるだけになっていた。
　干草が膝を覆ったとき、処刑の準備は終わった。首領が松明を掲げて江美の前に立った。
『それでは、ここに黄色い牝豚の火刑を執り

行なう。女、何か言い残すことはあるか？』
　惚けたように松明の炎に見入っていた江美は、その言葉ではっと我に還った。恐怖が江美のすべてを支配した。
『お願いです。助けてください。どうぞ……どんな罪の償いでもします。でも、命だけは助けてください。お願いですから……』
　嗚咽が喉を詰まらせて、最後は言葉にならなかった。
　一瞬の間があった。覆面に隠された顔からは、首領の意図を窺い知ることはまったく出来なかった。江美は全身を耳にして、彼の言葉を待った。
『罪を悔いておるのか？』
『はい！』
　縋りつく思いで江美は反射的に答えた。
『それでは、一度だけチャンスを与える』
　首領は低い声で言った。
『ああ、ありがとうございます……』
『慌てるな。儂の一存では判決は変えられん。皆の採決に委ねるのだ』
　江美を杭に縛りつけていた縄が解かれた。皮紐はそのままに江美は干草の上に跪かされ、

足首と腿を左右別々に重ねて縛られた。
『お前はこれから、メンバー全員の聖なる道具に奉仕を行なう。もし彼が奉仕に満足したなら、お前に清めの聖水を授けるであろう。お前にいささかでも不行き届きがあれば、彼は直ちに火刑を執行する。最後の一人までがお前の奉仕に満足したなら、あらためて儂が松明を干草の上に投げ入れる。十分に聖水が与えられておれば、火は消えるであろう』
　江美は首領の持って回った科白を、どうにか理解した。同時に、絶望を味わった。十数人の放尿くらいでしけってしまうような干草の量ではない。が――やはりこれは一幕の茶番なのであって、全員が同じ場所を濡らし、そこに松明が置かれるのではないか――という儚い希望も捨てきれなかった。
『一番手は儂だ』
　首領がズボンを脱ぎ、ローブを持ち上げて江美の鼻先に立った。それはひどく萎びていた。首領だから最年長――老人なのかもしれなかった。
　江美は首を突き出して、その萎えた物を口に含んだ。饐えた異臭が鼻をついた。が、今

の江美にはそんなことはたいして気にならなかった。どうすれば、この疲れきってにょろんとした代物を奮い立たせることが出来るか――それで頭が一杯だった。今にも火を点けられるのではないかという恐怖が江美を必死にさせ、同時に、技巧も何もない舌の動きにさせていた。
『ホォ、ちっとも効いちゃいないぜ。もっと真面目にやれ』
　背後から靴先を股間に差し入れられ、花芯がぐりぐりと抉られた。江美はびくっと腰を浮かせたが、それ以上の抵抗はせず、いっそう神経を口の中の物に集中させた。
　数分が経過したが、反応はなかった。
『女を鞭で打て。あの黒豚のように切り刻んでやれ』
　老人がじれたように叫んだ。
『だが、女。その間に少しでも休んだり歯を立てたりしてみろ。どうなるか分かっているな？』
　空気を切り裂く音に一瞬遅れて、尻に鋭い痛みが走った。これくらいなら耐えられる――と思った江美だったが、本当の効果はその

後に現れた。かぁっと熱くなるような鈍痛が臀部全体を蔽い、肉を削がれた後に空気が触れて生じた激痛がその中心を襲った。歯を喰い縛ることすら禁じられて、江美は中腰のまま全身を強張らせて痛みが薄らぐのを待つしかなかった。

二発目が正確に激痛の上をなぞった。江美はのけぞって悲鳴を上げた。しまったと思った瞬間、髪の毛を鷲掴みにされて引き戻された。喉の奥を硬い物で突かれて吐き気を催した。それが老人の怒張であると気づいて、江美は驚愕した。三発目が今度は背中に炸裂したとき、怒張は若者を凌ぐほどの勢いになっていた。老人は夢中で江美の頭を揺さぶり、あっという間に果ててしまった。青臭い香りが口の中に広がる。ためらいながらも、江美はそれを燕下した。

老人は江美を突き放した。崩折れた江美の背中に生暖かい液体が浴びせられた。

休む暇もなく、二人目の男が江美の前に立ちはだかった。男のそれはジェフの巨根にも劣らないサイズで、腫瘍にでも罹っているのかと疑うほどの節くれが江美の目を瞠らせた。

江美はのろのろと身を起こし、機械的な動作で男の腰に顔を近づけた。
『誰が口を使えと言った？』
　男は脚を上げて江美の胸を蹴った。仰向けに転がった江美の乳房を靴で踏み躙った。
『どこで奉仕するかは俺が決める』
　最後に胃の上をどすんと踏んづけた。
「ぐえっ……」
　悶え苦しむ江美を見下ろしながら、男は尊大に命令した。
『牝犬（ビッチ）に相応しいスタイルになれ。そして、俺の靴にキスをして、薄汚い穴をどうか清めてくださいと言え』
　江美は拘束された身体を苦労して反転させ、頭を地面に着けて四つん這いになった。小便を掛けられて湿り気を取り戻した皮紐が、若干の余裕を与えていた。膝を引きつけては上体を持ち上げて前に進み、ようやくのことで男の足下に這い寄った。また蹴られるのではないかと怯えながら靴を舐め、言われた通りの言葉を口にした。屈辱は、とっくに感じなくなっていた。
　男は江美の背後に回り、いきなりその捩じ

くれた怒張を江美の花芯に突き入れた。江美自身も驚いたことに、それはたいした抵抗もなく根元まで収まった。
『ちぇっ、こいつはとんだ色情狂だ。涎を垂らして待ち受けてやがったぜ』
観客が鼻を鳴らして、男の揶揄に応えた。
男の行為は持ち物の見かけに比べてずっと淡泊で、五分とかからずに終わった。男は江美を起き上がらせ、顔をめがけてたっぷりと放尿した。
全身濡れそぼって正座した江美の前に、水の入ったバケツが持って来られた。それで身体を洗えば干草は十分に湿る。しかし、その期待は裏切られた。
三人目の男は無情にも、江美の顔をバケツに漬けた。いきなりのことで息を吸い込む暇もなかった。顔を上げようとすると、上から押さえつけられる。じきに苦しくなって肺の中に残っていた息を吐き出してしまったが、まだ顔を上げることは許されなかった。水を呑み込み、苦痛と恐怖で不自由な身体をもがいて――力尽きかけたときになって、ようやく水責めから解放された。

『清めてもらおうってのに、よがったりするから、こういう罰を受けるんだ。お前は、俺達を楽しませることだけを考えろ』
『済みませんでした……』
　水を吐いて咳込んでいた江美は、素直に赦しを乞うた。
『さて、俺の番だが――前の二人はどっちが良かった？　口とプッシーと？』
『お好きなところを使ってください』
『質問に答えろ。もう一度顔を洗ってほしいのか』
『二人目の人の方が……』
『そうか。色情狂の牝犬としては、下の口にぶち込んでほしいって訳だな』
　そういう意味ではなかった。鞭がなかっただけ楽だった、というに過ぎない。無論、花芯に蜜を溢れさせていた事実は弁解のしようもないが、だからといって、これ以上の強姦を望むはずもなかった。だが、否定は責めを苛酷にするだけだった。
『はい』
　三人目の男はゆっくりと首を振った。
『そいつは残念だったな。俺は上の口を使わ

せてやろうと思っていたところだ』
『どうぞ、そうしてください』
『そうするとも。だが、俺は優しい性格でね。お前の願いも叶えてやることにした』
　男はローブの下からトウモロコシを取り出した。皮を剥きながら、猫撫で声で残酷な命令を下した。
『嬉しいだろう？　仰向けになって脚を広げろ。こいつを喰わせてやるから』
　それは日本で見かけるトウモロコシよりずっと大きく、それ一本で食事の代わりになりそうだった。そんな物が自分の中に入るとはとても思えなかった。だが、江美は彼女に許されている唯一の答え方をした。
『ありがとうございます……』
　男は受け入れの姿勢をとった江美の中に、無造作にトウモロコシを埋めていった。トウモロコシは江美の入り口を割り裂いて、ごつごつと侵入した。ピシッと、張り詰めた肉の裂ける感触があり、江美は十代の最後に感じた鮮烈な苦痛を再体験した。トウモロコシは三分の一程を残して止まった。
　男は江美を起き上がらせ、彼への奉仕を始

めさせた。それは、最初の奉仕にも劣らない拷問だった。男は右足を江美の股間に伸ばし、トウモロコシの軸を押し込み、あるいは気紛れに前後左右にこねくり回した。江美は苦痛と――不本意な快感に苛なまれながら、いつ果てるともない奉仕を続けるのだった。

この男の後に、まだ十人からの男達が控えていた。彼等はそれぞれの方法で、いっそう残酷に江美を責めるだろう。それ以上に――小便で汚れた肌や、他人の使った跡を清めるのにも、まだまだ厳しい手段を持ち出してくることだろう。

しかし。もう江美は、そんな先のことを考えてはいなかった。この汚辱の果てに本当に赦しが得られるのかさえも、漠然とした不安以上のものは感じていなかった。ひたすら眼前の男の命令に追従し、その意志に迎合することしか念頭になく、しかもその中に歪んだ歓びをさえ感じ始めている今の江美は、男達の罵る通り一匹の牝犬であり、穢らわしい牝豚でしかなかった。

６．甘美な悪夢

滑走路の端でターンしたジャンボ機はジェットエンジンの回転を上げ、ゆっくりと滑走を始めた。強大なエンジンの出力を受けて機体は微かに振動しながら、ぐんぐん加速する。窓際に座った麻原江美の眼下を、灰色の滑走路が流れ去る。

景色が前方に傾いたと思った瞬間、江美はシートに背中を押しつけられた。滑走路が、空港が急速に小さくなっていく。

アメリカが過去の世界へ去って行く――ますます小さくなる地上の風景にぼんやりと目を馳せながら、江美は胸の奥で呟いた。

あの、いつ果てるとも知れぬ奉仕。江美がはっきり覚えているのは、せいぜい五人目くらいまでだった。その後のことは――何をされたのかさえ、記憶が曖昧だった。

飲尿を強制されたような気もする。だが、飲んでも飲んでも口の中に水が注ぎ込まれた記憶も、微かに残っていた。あれは水道のホースだったのかもしれない。三人の男が同時

に江美を組み敷いていたときもあった……はずだ。

リンチの最後の部分は、かなり鮮明に覚えていた。干草の束の上に座らされたまま、江美の眼前に松明が投げられた。危惧していた通り、十数人の男達の小便くらいでは何の効果もなかった。江美の座ったすぐ前で炎が燃え上がり――江美は自身の放尿でそれを消し止めようとした。男達はそれを赦した。否、自分で消してみろと囃し立てた。

だが、その結果がどうなったかは定かでなかった。現にこうして助かっているのだから、火は消えたのかもしれない。しかし、あるいは。下半身を焙られながら意識を失った後、男達が火を消したのかもしれない。

あの白装束の男達が本物のＫＫＫ団だったのか、今では疑っている。秘密めかした結社から過激な政治団体に変貌したという話を、本で読んだことがある。あの連中はＫＫＫ団をダシに、加虐趣味を満足させているだけなのかもしれない。それとも、ディープサウスには昔ながらの組織が生き延びているのだろうか。

だが、すべては終わったことだ。

江美が息を吹き返したのは、農場からさらに町を離れた荒地だった。衣服と荷物は傍らに投げ捨ててあった。見殺しにするつもりではないらしかった。地面に大きく描かれた矢印の方角に歩くと、十分かそこらでハイウェイに出た。通りかかる車も無くはなかったが、江美は用心深くグレイハウンド・バスが来るのを待ったのだった。バスの乗客は、全身傷だらけ痣だらけで土埃に汚れきった彼女に眉を顰めたが、敢えて理由を問う者はなかった。レディーファストをやかましく言う国柄とは思えない冷淡さだったが――殺人を目撃しても係わり合いになるのを恐れて通報すらしない者も珍しくないという、「病んだ文明国」らしい反応であるとも思えた。

もちろん、そういった諸々の疑問や感慨を抱いたのは、ツアーの集合地に着いた後のことだった。それまでは呆然自失、鞭で手ひどい傷を負った黒人少女がどうなったかを気遣うゆとりさえなかった。

……そう、キャシー。雲海を眼下にして水平飛行に移ったジャンボの寛いだ座席の中で、

あの地で生きていかねばならない少女に思い至り、江美は彼女に同情を感じた。自分にとって、すべては一幕の悪夢でしかない。こうやって安全な場所で、静かに体験を振り返ることも出来る。そして。そうしている限りでは、その悪夢の中に倒錯した甘美な香りが、時を経るに連れていっそう濃く――忍び入ってくるのも確かなのであった。しかしキャシーには、あの町が現実のすべてなのだ。再び同じようなリンチに遭うことに怯えながら過ごす日々。それは、彼女が町を捨てるまで続くのだ。

来年もう一度Ｊタウンを訪れてみようかと、江美はちらっと考えた。が、あれほどの体験は一度きりで沢山だと、すぐに思い直した（少なくとも、今のところは）。あの二日間を繰り返し思い出しながら独り遊びに耽るのが、自分には合っていそうだった。

それよりも――自分と同じような**憧れ**を持った女性を見つけよう。直接でなくても十分だ。彼女に手加減した「体験談」を伝えて――彼女をＪタウンへ行かせよう。そして、彼女がどんな目に遭ったかを聞き出して、そ

れを甘美な悪夢の第二幕に加えよう。

　いつか江美は、自分が残酷なサディストに変身したような、二重の倒錯感情に浸っていた。

［完］